秋田県立博物館研究報告第42号　47～55ページ　2017年３月
Ann. Rep. Akita Pref. Mus., No.42, 47-55, March 2017

新聞記事からみた秋田のくらし・行事

― 昭和30年代後半を中心に ―

丸　谷　仁　美*

はじめに

企画展「四季のたのしみ　くらしのいろどり」(平成28年11月19日～平成29年４月２日)では、昭和30年代の秋田のくらしと、県内の祭りや年中行事を紹介した。この時期は高度成長期にあたり、くらしが大きく変化したとともに、集落内で行われていた祭りや行事にも変化がみられた時期でもある。

ここでは秋田魁新報の記事を中心に、昭和30年代の秋田について、主にくらしの変化を中心にみていき、そうした変化が祭りや行事などの民俗文化にあたえた影響などについても触れていきたい。

１.暮らしの変化

１）秋田国体がもたらしたもの

昭和36（1961）年に開催された第16回国民体育大会（秋田国体）は、戦後秋田県の大きな転換期になったといえよう。

国民体育大会とはそもそも、戦後疲弊した国民に活力を与えるため､昭和21（1946）年秋に京都･大阪・奈良で開催されたのがはじまりである。それ以降、地域ブロックごとに開催県を決め、毎年開催されるようになった。昭和35年の第15回大会が北海道東北ブロックで開催することになっており、この時はほぼ新潟県に決まっていたにもかかわらず、秋田県が開催県の名のりをあげた。当時秋田県は膨大な赤字をかかえていたが、誘致に成功し、翌16回大会を開催することになったのである（秋田県教育委員会 1996 389頁)。

競技場不足、宿泊施設不足などの問題があったものの、県民総ぐるみで選手を接待し、自宅に選手を泊める「民泊」が積極的に行われた。このことによって、後にこの国体は「まごころ国体」と呼ばれるほど、県民の接待は高く評価されることになった。

秋田国体にはおよそ２万人もの人々が訪れたと言われている。これほど大勢の県外客が秋田を訪れたことは恐らく初めてだったため、この国体によってさまざまなことに気づかされることになった。

当時の大きな問題は宿泊施設などの不足であった。国体に出場する選手のみならず、観光客が宿泊できる場所も限られており、早急に県外観光客に対する施設を増やす必要が生じた。

次に、店の接客態度の愛想のなさが指摘されている（秋田県広報協会 1962 13頁)。接客に慣れていないためであるが、こうした点について改善の必要が指摘された。

そうしたことがあったものの、国体に訪れた人々は、県内の風光明媚な場所を絶賛し、新たな秋田の魅力について気づかせてくれるきっかけを作ってくれた。昭和37年１月１日の朝刊には「昨年行われた秋田国体にやってきた全国二万のお客さん方は異口同音に十和田・男鹿の景観をほめ、秋田にこのような観光地のあるのを知らなかった。十和田・男鹿を見ただけでも秋田国体に参加したかいがあった、と賞賛をおしまなかった。われわれは自分の持っている観光地の本当の値打ちを知らずにすごしていたのではないか」と書かれている。男鹿の観光客は昭和30年代後半に飛躍的に増加し、県も観光施設や道路の整備などを行って、観光開発に乗り出すようになる。この頃から、自家用車や大型バス用の道路整備などが行われるようになっていった。

２）生活改善運動と電化製品の普及

次に、人々の暮らしの様子について見て行きたい。

図１は昭和30年、35年、40年の産業別就業者のグラフである。圧倒的に農業従事者が多いが、昭和40年までの10年間で、10万人近くも減少

*秋田県立博物館

している。反対に、建設業や卸売業などの農業以外の職業が徐々に増加していることが分かる。

①住居の変化

昭和30年ころから、いわゆる「生活改善運動」[1]が実施され、台所の改良などの生活習慣の改善が注目されるようになった。

昭和36年1月9日の夕刊には県内でも洋風の家が増え、フローリングの部屋やカーテンの家が増えてきたとある。昨年増改築をした家の6～7割が洋間を作り、インスタントと呼ばれる即席加工品を食べる家庭が増えはじめた。

②食生活の変化

また、生活の洋風化に伴い、今まであまり食べなかった生野菜が食べられるようになった。この時期の食器洗用合成洗剤の新聞広告には「生野菜も洗える」という文言が見受けられ、食器洗用合成洗剤で生野菜を洗っていたことが分かる。

合成洗剤で野菜を洗うことの是非については、新聞紙上でしばしば話題になっている。昭和37年には、東京都立衛生研究所（現東京都健康安全研究センター）が合成洗剤で野菜を洗うことについて警鐘を鳴らした記事が掲載されるものの（1962/1/11夕刊）、翌日の新聞には、「厚生省は問題ないと言っている」という反対の意見が掲載され（1962/1/12夕刊）、さまざまな物議を醸し出しているようであった。

結局、この問題は1月22日付朝刊上で「毒性は問題ない」との結論が出され、終結することになった。現在では洗剤で食物を洗うことはあまり考えられないことであるが、この頃はまだ農薬が普及しておらず、野菜についた回虫の卵などを取るためにはやむを得ない対策だったのであろう。

③電化製品の普及

県内では昭和30年代後半、テレビが飛躍的に普及した。昭和35年はわずか5.8％であったのに、5年間で80％近くまであがった。昭和39年の東京オリンピック開催に向けて、テレビを購入する家庭が多かったことが推察されるが、わずか数年の間の保有率の伸びには驚くべきものがある。

昭和37年には、秋田県内のテレビ普及率が41.1％で、東北一であるという記事が掲載された。昭和34年のテレビ開局当時には5千台であったことから、飛躍的にテレビが普及していると述べている（1962/6/8夕刊）（図2）。

その反面、同年10月11日の朝刊では、秋田県の生活水準を示すエンゲル係数[2]が51で生活水準が「極貧」にあたることが指摘されている。テレビやカメラの保有率が高い反面、電気洗濯機や電気釜、電気冷蔵庫などの保有率は低いという。

昭和37年には科学技術庁が全国農村の生活水準の実体を4年にわたって調査した記事が掲載された。平均寿命、乳児死亡率、結核死亡率などから、各県を上（位）・中（位）・下（位）と区別すると、青森、秋田、山形、福島、千葉、新潟、徳島、大分、宮崎の9県が下に位置づけられた。これら9県に見られることは、a）寄生虫などの農業従事者に

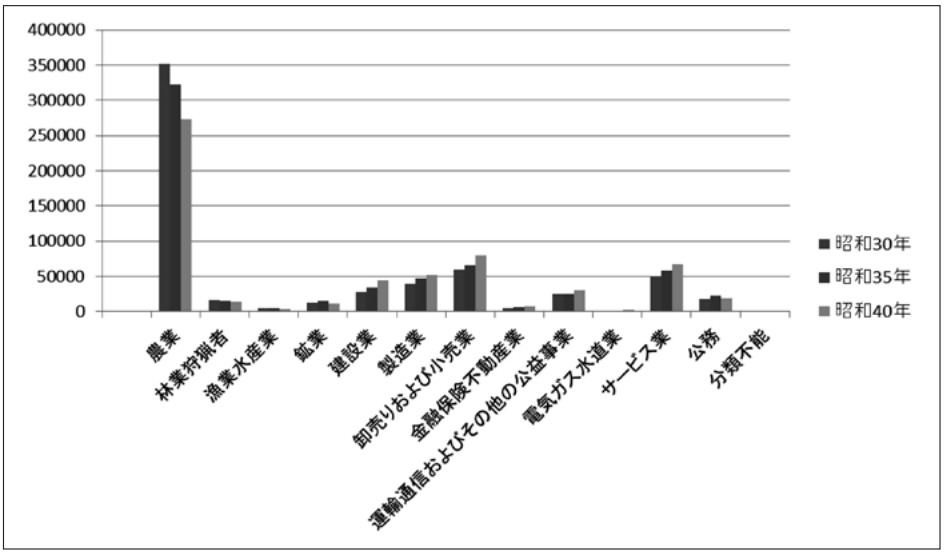

図1　産業別就業者（図はすべて秋田県県勢要覧より作成した）

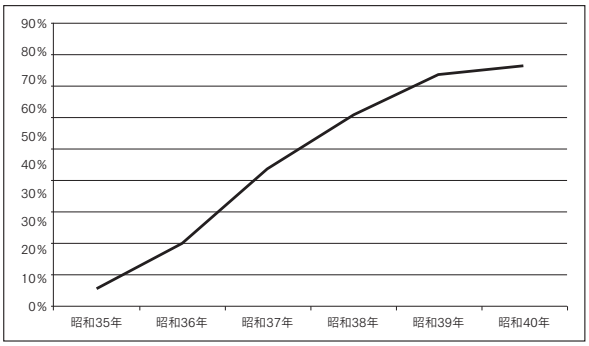

図２　テレビ保有率

特有の疾患が多いこと、ｂ）栄養が偏っていること、ｃ）衣服が衛生的でないこと、ｄ）住居が冷えること、ｅ）古い習慣が生活改善を阻害していること、ｆ）公共施設､医療環境が不備であること、であるという（1962/1/13 朝刊）。

昭和 30 年代は生活習慣が著しく変化するときであったが、同時に「電気洗濯機があっても体温計がなかったり、テレビがあっても子どもの机がないような生活のひずみ」（1963/10/15 夕刊）も指摘されている。電化製品などの便利な道具が入ってきたとはいっても、くらしの質がただちに上がるということではなかったことが、この記事からもわかる。

④休日の変化

この時期は、生活改善運動の一環として新たに休日を制定したり、集落の行事を旧暦から新暦で行うようになったりする傾向が見られる。

旧暦（太陰太陽暦）から新暦（太陽暦）への移行については、明治６（1873）年から新暦を採用して以来、正月や盆が徐々に新暦で行われるようになった。しかしながら当時はまだ旧暦で実施されるところが多かった。行事が新暦で行われるようになったのは終戦後、特に昭和 30 年代になってからが多い。

また、市町村の各集落では独自の休日を定めるようになった。農家では､盆や正月のほかは決まった休日があるわけではなかったが、健康と作業効率の向上のため、週１日もしくは月２日程度の休日をもうける運動が徐々に広まっていった。たとえば千畑村（現美郷町）では、昭和 34 年から週１日の休日を定めることと、正月を新暦で行うことを役場が提唱している（1961/1/13 朝刊）。また、本荘市石沢地区（現由利本荘市）では、国民の祝日のほか、集落の運動会、山の神、田の神、花見休日などを定め、農村の休日らしい面を見せているという（1963/12/24 夕刊）。

⑤統一祭典の実施

昭和 30 年代から、集落ごとに行っている祭りの日程を、町村単位で同日に実施する統一祭典が行われるようになる（1963/5/16 朝刊、1963/4/25 夕刊）。集落の人々は近くで祭礼があると手伝いに行ったりしていたが、会社員が増えはじめ、仕事を休めない人が増えてきた。そのため、町や村で一斉に祭礼日を統一するようになっていった。

３）新しい雇用形態～集団就職と出かせぎ～

①集団就職

集団就職は戦前から行われていたが、その数が増加するのは昭和 30 年代後半からである。この時期は東京オリンピックに向けて、都市部で建築ラッシュが続いたこと、工場での単純作業を行う人材が不足していたことなどから、県内でも、特に中卒者が数多く県外へ就職していった。

昭和 36 年の中卒者は昭和 20 年生まれにあたり、戦後最も人数が少ないといわれている。このため空前の求人ブームがおき、安い賃金で県内で働くより、好条件を提示する県外の企業へ就職する人が多かったことも、集団就職に拍車をかけたきっかけであった（1961/1/12 朝刊、1961/3/19 朝刊）。

大量の県外就職者を運ぶ集団就職列車は、３月の中旬頃から行き先別に運行され、春の風物詩になっていった。反面、都会でなじめず、数ヶ月で地元に帰る者もおり、各地相談所などを設けたり、東京都で行われる中卒就職者激励会に小畑知事が出席したりするなど、手厚い対策もとられた（1961/3/17 朝刊）。

②出かせぎ

昭和 30 年代後半から出かせぎ者の数も急激に増え始める。図３は昭和 30 年から 39 年までの出かせぎ者数であるが、わずか 10 年足らずの間に、４倍近くも増加していることが分かる。

出かせぎは江戸時代頃から行われている労働形態である。昭和 39 年１月８日付朝刊では、戦前までは零細農家が北海道などの農業や漁業を手伝いに、春から秋ごろまで出かせぎに行ったが、昭

和34年頃から、純農家の人々が農閑期に都市部へ出かせぎに行くようになったという記事が掲載されている。(図４)。出かせぎに行く理由として、a）ナワ、ムシロ編みなどの副業では食べていけなくなったこと、b）中央地域の建設需要が高まったこと、c）電化製品の購入や、農薬や肥料などが高騰したこと、などを挙げている。また、県内での就職先がないこと、農作業よりも出かせぎの方がはるかに楽であることも理由であるという(1964/6/21朝刊)。

出かせぎによる男性の減少に伴い、青年団や消防団といった集落内の組織も機能しなくなってしまった（1962/2/7夕刊、1963/12/13朝刊)。田植えや稲刈りの時期に男性がいないために農作業に支障をきたす集落もあらわれ、田植えや稲刈りの時期には小中学校を休校にして家の手伝いをする地域もあった（1962/5/15朝刊、1962/5/28夕刊)。

そんな中、留守を守る女性たちの活躍が目立つようになる。神岡町（現大仙市）では、県外就職者が多く、男性が集まらなくなったので、女性だけの青年学級を作ったり（1963/4/18夕刊)、若妻会が出かせぎに出た家の農作業を手伝ったりするようになったりし(1964/6/8夕刊､1964/7/2朝刊)、女性が集落の活動にかかわるようになったのもこの頃であった。

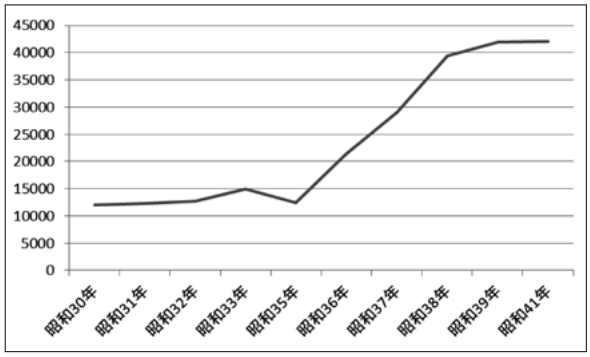

図３　出かせぎ者数

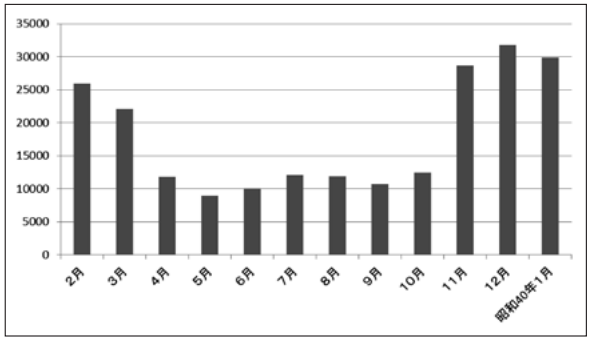

図４　出かせぎに行く時期（昭和39年）

２.「秋田」を売り出す

１）人口減少と祭り行事の変容

このように、昭和30年代は生活改善運動や電化製品の普及でくらしが便利になる一方、まだその波には完全に乗り切ることができなかった。また、出かせぎや集団就職などで県外へ出ていく青年達が増えていき、離農する人々も出るようになって、集落や家族構成に変化が生じつつある時期であった。

そのため、集落で行われてきた祭りや行事に変化が見られるようになった。

現在重要無形民俗文化財に指定されている「土崎神明社祭の曳山行事」（通称土崎神明社例祭）では、昭和35年から神輿の巡行を徒歩から車に切り替えた。以前は本通りのみ行っていた神輿の巡行を、祭礼に係わる地域全域に広げたため、巡行距離が長くなったことと、神輿の担ぎ手であった周辺農家の兼業化が進み、担ぎ手を確保できなくなったことが要因である(秋田市　1993　79頁)。

同じく重要無形民俗文化財の「根子番楽」も、昭和39年には集落から61人の出かせぎ者がいたため、演じられない番楽が多数出た。演目数も、以前は19演目あったが、現在は11番のみしか演じられず、この時期衰退の危機に見舞われているとある（秋田県広報協会　1964　23頁)。

にかほ市象潟町横岡地区で行われている横岡番楽（鳥海山日立舞）も、戦後一時期盛り上がったものの、演じる場所がなくなったために衰退の一途を辿っていた(1962/11/23朝刊)。しかしながら、昭和34年に保存会が結成され、集落で番楽をもり立てていったところ現在まで続き、平成24年に国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択されている。

２）観光事業と観光地の整備

さきほども述べたが、昭和36年の秋田国体は、県外の人々に秋田を見てもらう好機となった。当時は高度経済成長期にあたり、好景気に恵まれていた時期でもある。昭和39年に開催される東京

オリンピックを見据えて、さらにさまざまな計画がすすめられることになった。

秋田県では、昭和38年から「総合開発八ヶ年計画」を策定し、農業の近代化や産業基盤の整備拡充、生活環境の整備などを中心課題として施策の推進をはかった。この事業の中でも観光事業は大きな柱になっており、観光事業の基本方針として県はａ）広域観光の確立、ｂ）大衆観光の振興、ｃ）産業観光の振興の３点を挙げている。

この方針のもとになっているのは、この頃の観光客の傾向が、１ヶ所の観光地にとどまるのではなく、周辺地域もまわって歩ける、周遊型の観光圏を望んでいたことである。ちょうどこの時期、観光地は「点の観光から線の観光に移り、そして線の観光から圏の観光へと移りかわってきて」いた（秋田県広報協会 1963 ４頁）。

周遊型の観光を可能にするために、早急に道路整備を行う必要があった。道路の整備は観光客の誘致に効果があることが、昭和36年の秋田国体前に完成した寒風山スカイラインによって男鹿半島の観光客が飛躍的に増えたこと、翌年に完成した八幡平樹海ラインも観光客数を伸ばしていることからもわかる（図５）。

道路整備を行い、自家用車で観光地へ向かうことができるようにしたとともに、県や国では各地に国定公園、県立自然公園を制定していった[3]。中でも男鹿半島は昭和36年から観光施設を整備していき、昭和48年には国定公園に指定されている。

３）産業観光としての祭り・行事

県が観光事業の基本方針のひとつに掲げた産業観光の振興とは、県内の産業開発と組み合わせた発電所、ダム、空港などを観光ルートの中に取り入れ、さらに各地で行われている祭り、芸能などや特産品の開発紹介等も含めた多面的な産業観光の発展を実現する計画（秋田県観光協会 1966 39頁）である。ちょうどこの頃、集落で行われている祭りや行事に観光客を意識した企画が加わるようになった。

このことと関連性は不明であるが、昭和39年、秋田県指定無形民俗文化財（当時は無形文化財）に、県内の民俗芸能16件が指定された。それまでに民俗芸能の県指定はなく、また一度に16件も指定された例はこの年よりほかにはない[4]。この指定を受けて同年、県教育委員会、秋田魁新報社、県芸術文化団体連盟とで、県指定となった16団体の演目を披露する民俗芸能大会が開かれ(1964/11/17朝刊)、県内で民俗芸能が披露されるさきがけになった。

３.「見せる」祭りへ

１）三大祭りの誕生

重要無形民俗文化財に指定されている秋田の竿燈は、秋田国体の開会式で披露されたことによって人気が高まっていった。この人気を受け、翌37年、国鉄東北支社（現JR東日本東北支社）が、青森ねぷたと秋田の竿燈、仙台七夕祭りをめぐる周遊観光列車を企画する（1962/7/10朝刊）。こ

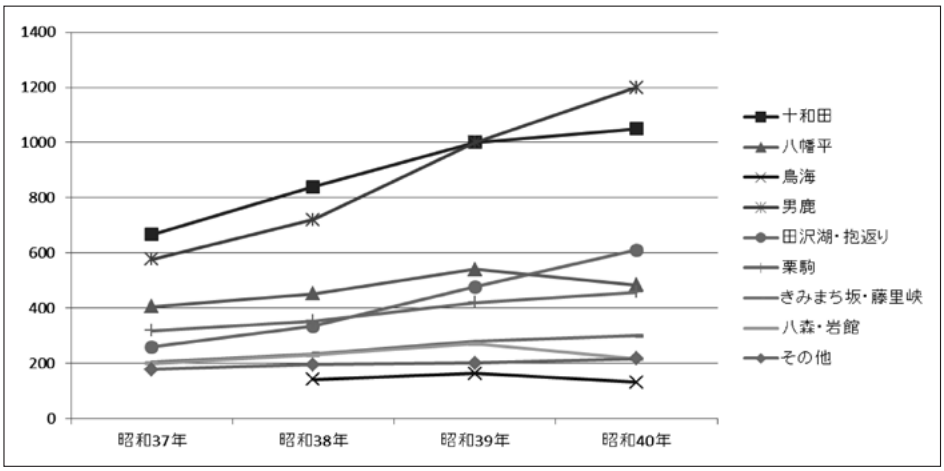

図５　主要観光地

の列車は東北各地で行われる祭りを一度に見られるよう企画したもので、３つの祭りの実施日が若干重複するため、国鉄はそれぞれの祭りの日程をずらしてもらうよう交渉をしている（1962/6/17朝刊）。この周遊列車は、点の観光地を圏の観光地とする計画にあてはまるもので、観光客が祭りに行きやすくなるきっかけとなり、今日の東北夏祭りツアーへつながっていった。翌38年には、好評につき、周遊列車を２本に増発している（1963/7/5朝刊）。

昭和38年には、周遊列車でめぐる青森ねぷた、秋田の竿燈、仙台七夕祭りの３つの祭りを、「東北三大祭り」と称して関西地方や関東地方に宣伝した。このため、竿燈を訪れた観光客は昨年より３割客が増え、10万人が訪れたという（1963/8/7朝刊、1963/8/9朝刊）。

各地で行われる祭りや物産などに「三大・・」と名づけることは広く行われているが、秋田県内の祭りを「三大・・」と名づけて紹介する記事が見られるのは、昭和30年代頃からであろう。例えば羽後町の西馬音内盆踊り、鹿角市の毛馬内盆踊り、八郎潟町の一日市盆踊りを「三大盆踊り」と称して紹介する記事が、昭和33年頃から見られるようになった。この時期、全国的に八郎潟干拓事業が注目されており、それにともなって一日市盆踊りにも大勢の観光客が訪れ、注目を集めるようになったと思われる（八郎潟町教育委員会2005　67頁）。

「三大・・」という言葉は、一つの祭りから他の祭りへ誘うきっかけになる効果的な言葉として、この後盛んに新聞記事に登場するようになった。

２）東京オリンピックと祭りの公開

昭和30年代後半には、東京オリンピックに向けて、県外や海外からの観光客にも地域の祭りや行事を紹介する企画が行われた。

秋田の竿燈は、祭りの担い手不足に悩まされつつも、昭和20年代後半から積極的に県外の人々へ見てもらうよう、各地で演技を披露してきた（1964/7/29朝刊）。秋田国体によって一躍注目を集めることになり、昭和38年には東京国立競技場で開催された東京国際スポーツ大会に、全国からただ一つのアトラクションとして出演することになった（1963/9/12朝刊）ほか、翌39年にはアメリカで開催された世界博覧会で日本館が開場する際にも出演している（1964/1/16朝刊）。また、東京オリンピックの閉会式後に、池田首相が主催した「さよならパーティ」で、日本の伝統芸能を披露する機会があり、このときにも竿燈の演技が披露された（1964/9/10朝刊）。

東京オリンピックの開催時期、東京文化会館で、日本の美術や芸術を紹介する展示会が開催された。この会には角館町（現仙北市）のおやまばやしと、羽後町の西馬音内盆踊りが出演している（1964/7/1夕刊）。

このように、東京オリンピックをきっかけにして、秋田の祭りが県外で演じられることになり、海外へも知名度を上げるきっかけとなった。

３）民俗芸能大会の開催

東京オリンピックに関連したものだけでなく、祭りや民俗芸能を県内外へ披露する試みが、このころから積極的に行われるようになった。

先ほど伝承者不足に悩まされていると述べた根子番楽は、昭和10年に民俗学者折口信夫のすすめで日本民俗芸能大会に参加したのをきっかけに（阿仁町　1992　584頁）、県外の大会に出演しているが、この時期にも大阪や仙台の芸能大会に出演したり（1961/1/15朝刊）、昭和38年に阿仁合線の開通式に伴った番楽を披露したりしている（1963/9/16夕刊）。

伝承者不足に悩まされていても、さまざまな地域で祭りや民俗芸能を披露することは、演じる人々にとって大きなやりがいを生み出すきっかけになっていった。

昭和34年から、北海道と東北各県の祭りや芸能を一つの会場で公開する「北海道・東北ブロック民俗芸能大会」も開かれるようになった。この大会は現在でも行われており、昭和52年からは秋田県内の民俗芸能を公開する「秋田県民俗芸能大会」も開催されている。

こうした大会は時間と場所の制約があるため、ともすると演じる時間を短縮したり、観客に喜んでもらえるような演目ばかりを演じたりしてしま

いがちになる。しかしながら観客にとっては、普段見ることのできない遠方の祭りや芸能を一度に見ることができ、演者たちは、大勢の前で演じることによって、自分たちの祭りや行事の歴史や伝統を再確認することができるため、これらの会は、後継者を育成するうえでも大きな役割を担っているといえる。

４）祭りの整備～観光化に向けて～

県内の祭りも、この時期には観光化を意識した祭りや行事が見られるようになった。

たとえば観光協会が関与して、観光客向けに新たな祭りを作り出した例がある。

男鹿市観光協会は、昭和39年2月14日から3日間の日程で「ナマハゲ柴灯祭り」と称する新しい祭りを実施した。これは大晦日から小正月に、男鹿半島の各地で行われるなまはげ行事と、門外不出の神事であった「柴灯行事」をもとにして作り上げた祭りである。この年は北浦湯本の星辻神社で行われたが（1964/2/15朝刊）、この祭りは現在も2月の中旬に男鹿市真山神社で行われている。

また、横手市で旧暦1月15日に行われていたかまくら行事も、昭和29年から横手市と横手市観光協会が主催して「雪まつり」と称し行われるようになった。横手のかまくら行事は首都圏にポスターを配布し（1962/1/17夕刊）、早くから宣伝につとめたため、大勢の観光客が訪れた。

各地で行われていた祭りや行事に、観光客向けの企画が付与されることが多くなったのも昭和30年代からである。

大館市で行われる「大館神明社の祭礼」は、各町内から出される大型の曳山が見どころのひとつであるが、昭和38年から「ひき山コンクール」が行われるようになり、各町内で曳山の装飾や囃子の技術などを競い合うようになっていった（1963/9/11夕刊）。

重要無形民俗文化財に指定されている鹿角市の「花輪祭りの屋台行事」（通称花輪ばやし）は、「腰抜け屋台」と呼ばれる独特の形の屋台が町内を巡行する祭りであるが、列車で訪れる観光客のために、昭和35年から、全町内の屋台が鹿角花輪駅前に終結する「駅前パレード」が行われるようになった（鹿角市教育委員会 2013 149頁）。

同じく重要無形民俗文化財に指定されている仙北市の「角館祭りのやま行事」（通称角館のまつり）では、やま（曳山）の巡行の際、やま同士が出会った時に道を譲る交渉が行われる。その交渉が決裂すると、やまをぶつけ合う「やまぶっつけ」が行われ、祭りの見どころのひとつになっている。現在、観光客のために「観光やまぶっつけ」が行われているが、このことも昭和30年代後半から行われるようになったといわれている（角館町 1997 41頁）。

祭りや行事の特徴を知ってもらうため、名称を変更した行事もあった。毎年8月6日、7日に行われる湯沢市の七夕絵どうろう祭りは、以前は「七夕」とだけ呼ばれていたが、絵どうろうが中心であることを知ってもらうため、湯沢市では昭和39年から「七夕絵どうろう」と統一することになった（1964/7/11夕刊）。

観光を意識した企画が行われるだけでなく、各地で後継者育成を意識した試みがこの時期から盛んに行われた。

祭りや行事を伝承する保存会が結成されはじめたのもこの頃であり（鹿角市教育委員会 2013 148頁）、各地で保存会を中心として自分たちの祭りや行事の歴史を再認識するようになっていった。本荘市で行われていた北ノ股番楽（現由利本荘市）では、曲や踊りを録音したり16㎜フィルムにおさめたりして記録し、次世代に正しく伝える試みがなされた（1963/7/25夕刊）。

このように、観光化の波にのって「見せる祭り」が意識されはじめる反面、各集落で伝えられてきた祭りや行事の伝統を守り、次の世代に伝えようとする試みも各地で行われていたことがわかる。

４．あらたな民芸品の誕生

１）再評価された民芸品

観光地を訪れる楽しみのひとつに、土産物がある。秋田県の土産物に転機が訪れたのも、秋田国体からであった。国体の土産として配ったことにより再評価されたものや、東京オリンピックに向けて新しい民芸品が作られたものなど、後継者不

足や、製品が使われなくなったために廃れつつあった民俗技術が、民芸品の製作によって新たな息を吹き返すものもあった。

①戸波ケラ

横手市増田町戸波で作られていたケラは海藻を織り込んだ装飾性の高いものであるが、昭和30年代には編む人も少なくなってき、徐々に需要もなくなっていった。そこで、横手市十文字町仁井田で作られていたスゲ笠とあわせ、ミニチュアの壁掛けを考案したところ、飛ぶように売れた。昭和34年には「けら保存会」を結成し、雪ぐつやボッチなども民芸品として販売するようになった（1962/5/14夕刊）。昭和37年にはミニチュアのケラと笠を外国向けの観光民芸品も販売している（1962/12/9朝刊）。

②ごてんまり

本荘市（現由利本荘市）で行われていたごてんまり作りは、昭和30年代後半には伝承者がわずか数人のみであった。このごてんまりを秋田国体の際に選手の贈り物にしたところ大変評判がよく、国体の土産物として数多くの注文が殺到した。この時はごてんまりを作る人が少なく対応することができなかったが、本荘市や観光協会がごてんまりの製作技術の保存に力を入れ始め、現在では由利本荘市を代表する民芸品となっている（1963/10/8夕刊）。

２）新しい民芸品

昭和36年の秋田国体に向けて新たな土産物を売り出すため、この年県に登録出願された土産物の数は前年の約8倍になったという（1961/4/13朝刊）。新しく開発された土産物もあれば、伝統的なものに新しい要素を加え、海外をも視野に入れた新たな民芸品が作られるようになった。

①中山人形

中山人形は、明治のはじめ頃から横手市で作られている土人形である。主に歌舞伎を題材としたものが多かったが、昭和38年、卯年にちなんでマサカリウサギを製作したところ、大反響であった（1963/1/13朝刊）。その後も干支にちなんだ土鈴を毎年販売するようになり、昭和54年と平成26年には郵便切手の図柄に採用されている。

この他にも、この時期世相を反映した新しい人形を製作し、県外の物産展で販売することによって中山人形は全国の人々に知られるようになった。

②お杉わらべ

お杉わらべは、大館工芸社が昭和34年から売り出した男女一対の杉の人形で、現在でも県内の家庭に置かれているのをよく見かける。これは昭和37年、日本商工会議所で開かれた全国観光みやげ品連盟主催の「全国郷土人形コンクール」で通産大臣賞を受けたことをきっかけに、県内だけでなく、県外にも幅広く広まり、秋田を代表する土産物になったものである（1962/2/13夕刊）。

③樺細工・大館曲げわっぱ

角館町に伝わる樺細工も、昭和30年代には後継者不足に悩まされていた（1963/3/2夕刊）。しかしながら、秋田国体の土産物として県外客へ売り出したり、海外の雑誌で紹介されたところ、海外での反響が大きく、東京オリンピックに向けて海外での注文が増えていった（1964/4/23夕刊）。

大館曲げわっぱも海外の雑誌で紹介され、比較的安価な日用品を製作したところ、県外客からの注文が増え、物産展などで数多く売り出されることになった。

また、能代市で作られている能代春慶も、秋田国体の土産物として日用品を製作し、販売するようになった（1961/1/7夕刊）。

おわりに

昭和30年代の秋田県は、集団就職や出かせぎにより、県外に大勢の青年達が流出し、集落内で行われていた祭りや行事の後継者不足にみまわれていた。その一方で、秋田国体と東京オリンピックという大きな事業を受け、観光化に大きく乗り出した時期である。祭りや行事は時代によって少しずつ形を変わっていくものではあるが、秋田県の場合、特に昭和30年代後半に大きく変化したことが分かる。

こうした変化を受け、各集落でのくらしや祭り、行事が現在までにどのように受け継がれてきたかについては、今後個別に報告していきたい。

註

（1）生活改善に関する運動については、生活改善運動や新生活運動などさまざまな名称があるが、ここでは生活改善運動という文言に統一したい。

（2）エンゲル係数とは家計の消費係数にたいする飲食費の割合のことで、高いほど生活水準が低いとされる。

（3）この時期に国や県に指定された自然公園には、鳥海国定公園（昭和38年）、八森岩館県立自然公園（昭和39年）、きみまち阪県立指定公園（昭和39年）がある。

（4）秋田県教育委員会は、昭和33年から3ヶ年計画で民俗芸能調査を実施し、昭和38年に『秋田の民俗芸能』という報告書を刊行している。翌年の県指定には、この調査結果を受けたものと思われる。

引用文献

秋田県　1955～1965『秋田県勢要覧』
秋田魁新報社『秋田魁新報』
秋田県教育委員会 1963『秋田の民俗芸能』
秋田市教育委員会　1993『土崎神明社祭の曳山行事』土崎神明社社務所
秋田県教育委員会　1996『ふるさと秋田の学びー出会い・発見・感動ー』秋田県教育委員会
秋田県広報協会　1962『あきた』12号　秋田県
秋田県広報協会　1963『あきた』14号　秋田県
秋田県広報協会　1964『あきた』24号　秋田県
阿仁町　1992 『阿仁町史』阿仁町
角館町　1998『角館祭りのやま行事報告書』角館町
鹿角市教育委員会　2013『鹿角市文化財調査資料第一〇五集　花輪祭り』鹿角市
八郎潟町教育委員会　2005『秋田県記録選択無形民俗文化財　一日市盆踊り調査報告書』八郎潟町